

2016年MHB研究大会「継承語教育と超多様性」事前資料

基調講演 2

(2016/8/9 お茶の水女子大学 共通講義棟 2号館 201号室)

「多様化するニーズとは：継承語学習者の超多様性を考察する

Addressing super-diversity: Identifying various needs of our heritage language learners」

坂本光代氏（上智大学教授）

要旨

多様性の重要性は昨今認識されてきているが、単なる個々の「違い」だけでなく、社会的制約の中で多種多様なものが遂げる独自の変化を「超多様性」と呼び、注目するようになってきた(Blommaert, 2013)。この超多様性の中で多様なものが集まって1つのまとまりになることを、Blommaert (2013) はエントロピー(entropy) (一様化)、多様性の中で多種多様なものが共存する様をconviviality(共愉)と呼んでいる。様々なグループがひしめき合う中、共存を図り、それぞれがエントロピー的相互作用で落ち着き、社会を作り上げているという概念である。

実際日系ブラジル人の継承語研究によると、「日系」と一括りには出来ず、二世なら二世、三世なら三世と、世代独自のニーズが浮き彫りとなった(Sakamoto & Matsubara Morales, 2016)。同様に在カナダ日本人家庭での継承語教育研究によると、カナダ社会の制約の中、日本語教育・保持は独特の変遷を遂げていた(Sakamoto, 2006)。在日ペルー人家庭でもやはり日本の社会的・教育的制約の中で、独自の言語方針を編み出し、実践していたことが分かった(坂本&宮崎, 2014)。継承語学習者が遂げる変化をただ単に「個人差」もしくは「民族性」で片付けるのではなく、言語使用、政策、言語価値等様々な社会的背景によって継承語習得は大きく左右されるという認識を持つ事が望まれる。

本講演では、まずBlommaert (2013)の超多様性の定義に着目し、バイリンガル教育理論(e.g., Cummins, 2001)なども交え、カナダ・ブラジル・日本における継承語教育研究を事例に継承語学習者の超多様性について考察する。

参考文献

Blommaert, J. (2013). *Ethnography, Superdiversity and Linguistic Landscapes: Chronicles of Complexity*. Bristol, UK: Multilingual Matters.

Cummins, J. (2001). *Negotiating Identities: Education for Empowerment in a Diverse Society* (2nd Ed.). Ontario, CA: CAFE.

Sakamoto, M. (2006). "Balancing L1 maintenance and L2 learning: Experiential narratives of Japanese immigrant families in Canada." In K. Kondo-Brown (ed.), *Heritage Language Development: Focus on East Asian Immigrants* (pp. 33-56). Amsterdam: John Benjamin Blackwell.

Sakamoto, M. & Matsubara Morales, L. (2016). "Ethnolinguistic vitality among Nikkei Brazilians." *International Journal of Bilingual Education and Bilingualism* 19(1), pp. 51-73.
DOI: 10.1080/13670050.2014.961711.

坂本光代&宮崎幸江(2014). 「日本に住む多文化家庭のバイリンガリズム」宮崎幸江(編)『日本に住む多文化の子どもと教育：ことばと文化のはざまで生きる』(pp. 17-46). 東京：上智大学出版.

